

厚生労働科学研究費補助金  
感覚器障害研究事業

# 日本各地の手話言語に関するデータベースの作成

平成17～19年度 総合研究報告書

主任研究者 福田 友美子

平成20(2008)年3月

## 目 次

I. 総合研究報告	
日本各地の手話言語に関するデータベース	1
福田 友美子	
II. 研究成果の刊行に関する一覧表	125
III. 研究成果の刊行物・別刷	125

厚生科学研究費補助金（感覚器障害研究分野）  
（総合）研究報告書

日本各地の手話言語に関するデータベースの作成

主任研究者：福田友美子 国立身体障害者リハビリテーションセンター  
研究所聴覚言語障害研究室長

研究要旨

手話言語には、日本語のような音声言語と同様に、地域による違いや年代による大きな違いがあることが知られている。しかし、これまでわが国において、世代や地域による違いについては、いくつかの地域で手話表現を収集することが試みられているだけで、分析的・総合的な研究は実施されてこなかった。そこで、本研究では、日本各地の地域や年代による手話表現の違いを明らかにすることを目的にした。そのために、次の2箇所、次のような研究を実施した。

①東京地域：20歳台から70歳台の広い世代のろう者14名を対象に、約30分くらいの手話表現を収録し、使用単語を調べ上げ、単語の使用状況を調べた。さらに、東京地域の在住の30歳台のろう者の手話言語を中心に作製してある電子辞書を活用して、高齢ろう者で使用される単語の種類や語法がどのように若い世代と違うか、分析・整理した。最終年度の平成19年度は、32単語について高齢聾者の特徴を現す例文を作成し、手話表現の含む画像データベースを作成した。②京都地域 30歳台から80歳台の京都府立ろう学校を卒業した30名のろう者の対話での手話表現を収録・分析した。続いて東京地域の手話表現を収録したDVD資料の活用により、年齢だけでなく地域による語彙使用の違いの分析を行った。以上の分析結果を踏まえて聾学校の手話言語環境に関する仮説を策出し、最後にこの分担研究で得られた言語資料を手話通訳養成、手話言語研究、特別支援教育等に活用するための枠組みを考察した。

研究分担者 大杉 豊・筑波技術大学 准教授

準手話確定普及事業により、全国に標準手話が普及している。上述の手話奉仕員養成もこの標準手話を中心とするものである。

A. 研究目的

①手話通訳の現場における課題

障害者自立支援法では市町村における手話通訳派遣が義務化されている。厚生労働行政においても、手話奉仕員と通訳者の養成カリキュラムが以前に策定され、地域での手話通訳の設置と派遣が推進されてきた。

しかし、(1)聴覚障害者一人ひとりの受けた教育内容に差異が大きいこと、(2)地域による手話の違いが大きいことを主な理由に、標準手話を学んだ手話奉仕員や手話通訳者が聴覚障害者の手話を読み取るときに困難さを感じる傾向が指摘されている。

また、聴覚障害者の当事者団体に委託された標

とくに、高齢者の手話表現を読み取って日本語

### (別添 3)

に通訳する作業が困難とされているため、高齢者が使用する手話が、若年層の手話とどういう面で違うのかという分析による成果を手話通訳養成に反映させていく必要がある。

#### ②手話の言語的認知によって生じる課題

2006年国連総会にて「障害者権利条約」の制定があった。現在は各国政府による批准段階であるが、この条約では言語を音声言語と手話言語両方を含むものと定義している。これは国際的に手話が言語として認知されたことを示す。

よって、日本でも手話が言語であることを国民に説明して、聴覚障害者が諸権利を行使する上で手話の使用が欠かせない条件であることを法律等に反映させていく時期に入っている。

手話が言語であることを説明するひとつの方法として、日本語と同様に地域や年代によって広がりがあり、単語や文法に言語としての構造があることを示す言語地図の作成が求められている。

地域独特の手話表現を収録した単語集がいくつか出ているが、これらの成果を踏まえた上で、地域や年代による手話の違いを明らかにする、分析的・総合的な研究が、言語地図の作成にあたっての必要条件である。

#### ③ろう教育現場における課題

ろう教育においては、ろう学校の生徒数減によるさまざまな問題が指摘されているが、そのひとつに、同じ聴覚障害を持つ成人がどのように生活をしているのかを学ぶ機会が少ない点である。とくに高齢者が同じ社会の中でどのような経験をしてきたのかを知ることが重要である。

そのための具体的な方法として、たとえば同じろう学校の卒業生一人ひとりが手話で語る映像をいつでも見られるような映像ライブラリーの設置が考えられる。

#### ④本研究の目的

以上に述べた3つの課題に応えるための基礎研究として、地域や年代によるさまざまな手話表現

をデータとして収集し、手話通訳養成、言語地図作成、映像ライブラリーなど汎用的な目的に応用できるシステム作りを目指す。

#### B. 研究方法

##### (1)ろう者の対話を対象にした研究

東京地域と京都地域それぞれにおいて、各地域に在住するろう者を対象に、40～50分程度の対談をしてもらい、手話表現を収録する。次に、この一連の対話を、単語レベルに区切り、出現している各単語にラベル付けをする。データベースソフトを用いてこの結果を整理し、単語毎に検索できるデータベースを作成し、つぎのように研究を実施した。

A. 使用頻度の高い基本単語を、地域や年代による違いも考慮に入れながら、調べる。

B. 使用頻度の高い単語について、特に地域の特性や高齢者の特性を考慮しながら、どのような語義をもっているか分析する。

##### (2) 東京地域の若いろう者の手話言語についての電子辞書（作成済）を活用した研究

「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」（平成11～13年度厚生科学研究費補助金）（感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業（感覚器障害研究分野））の研究で、電子辞書を作製した。この辞書に掲載してある単語や文の表現（ビデオ動画）を、東京在住で高齢のろう者や京都在住のろう者にみてもらって、年代た地方によって異なる手話表現の違い（語法の違い）について、ろう者に詳細なインタビューを実施し、単語の語義別に違いを整理し、手話言語の時間的な変化について検討した。

#### C. 結果と考察

以上二つの研究方法を用いて、東京地域と京都地域で各地域の手話言語の研究を実施した。それぞれの研究で得られた結果と考察を、分けて記述

### (別添 3)

する。

#### (A) 東京地域

##### (1) ろう者の対話を対象にした研究から得られた結果

① 14名のろう者の対話で拾い上げられた単語のラベルの数を、手型別に表2に示した。手話言語で使用される手型の種類の分類には様々な考え方があるが、今回、我々は表2にあげたように分類した。手話言語の単語は、手話言語の音韻の1種である手型で表現されるが、その使用頻度には、音声言語の音韻の使用頻度と同様に、大きな違いがあるとたびたび指摘される。今回の分析によって、使用頻度の多い手型がなにかについて、客観的なデータをに示すことができた。

また、使用頻度の高い単語を調べてみたところ、たとえば手話単語「意味」や「オーバー」は若いろう者では使用頻度が高いが、高齢者では高くない。これらの単語は、世代によって語法が異なっていることがわかっているが、そのために使用頻度に差が生じていると思われた。

それぞれの対象者について、30分あたりでの対話での総単語数と単語の種類について、分析が集計しているものだけについて、その結果を表3に示した。ろう者が日常会話のなかでどのくらいの量の単語の種類をつかっているかなど、これまで客観的な資料がほとんどなかった。ここでの結果からみると、高齢のろう者のほうが多くの種類の手話単語を使用しているように思われる。これが一般的なことであるかどうかなどについて、今後はその実態やそのような状況が生じる原因などを検討していきたい。

##### ② 単語表現の変化

ろう者が生活している社会情勢の変化によって、単語の表現に変化が見られるものがあつた。その例としては、「仕事」がある。以前はろう者が就く仕事の多くは手作業によって製品を製作する職種がおおかつた、そのために「作る」の単語が「仕

事」をあらわしていた。その後、印刷関係の職種がろう者の代表的な職種になり、「印刷」を表す単語で「仕事」を表現するようになった。同様の例には、「外国人」「助手」などがある。

##### ② 語彙の拡大

社会の変化に合わせて、あたらしく出現した単語がかなりあつた。その例としては、「コマーシャル」がある。若いろう者ではアルファベットの指文字(CM)で表現されることが多いが、高齢者では「休憩」「宣伝」などの単語があてられる。

##### ③ ロールシフトやCLの多用

高齢ろう者の対話では、手話言語を特徴付ける「CL」が多用されていた。例えば、60歳台のろう者では30歳台のろう者に比べて、1.8倍多くCLが使用されていた。ロールシフト表現も多い。これらについて現在も詳細な分析は現在進行中で、今後、報告したい。

##### (2) 電子辞書を活用した研究から得られた結果 (高齢のろう者と若いろう者の手話言語の語法の違い)

「日本手話学習のための基本語彙を中心にした日本手話-日本語辞書の作成」(平成11~13年度厚生科学研究費補助金)(感覚器障害及び免疫・アレルギー等研究事業(感覚器障害研究分野))の研究で作製した電子辞書を、高齢のろう者にみてもらい、高齢のろう者ではつかわない若いろう者に特有の語法を指摘してもらった。そして、そのような新しい語法が出現してきた事情などについて、インタビューした。使用頻度の高い重要単語の中にも、高齢ろう者と若い世代でその語法が異なっていて、変化してきた単語があることがわかつた。さらに、そのように変化している語法の例文を表現する手話文を、高齢のろう者に表現してもらい、収録した。それらの手話文では、高齢者に多用されるロールシフトやCLの表現がよく見られた。

以上の研究を基に、研究の最終年度である平成

### (別添 3)

19年度には、語法が変化した32単語(表4)について、各単語単語の高齢ろう者と若いろう者の手話表現を両方のせて、違いがみられる手話言語のデータベースを作成した。データベースでの単語の検索の流れを、図1に示した。検索の流れは、基本的に、平成11～13年度の研究で作成した電子辞書と同じである。説明画面のディスプレイ画面を図2に、単語の説明画面の例を表5に示した。

今後、作成したデータベースを学習者に提供できるようにしていく予定である。なお、作成した32単語の例文およびその説明の画面を、巻末の資料に載せたのでご参照いただきたい。

## (B) 京都地域

### (1) ろう者の対話を対象にした研究から得られた結果

京都地域に在住する京都府立聾学校卒業生32名(20歳代～80歳代)の手話表現を分析したところ、語彙において年齢層による語彙上の違いが顕著なものとして認められた。とくに重要なものを取り上げて、以下に記述する。

なお、聞き取り調査への協力者それぞれの京都府立聾学校就学状況を表6にまとめて、識別番号を割り当てた。以下の記述に識別番号を用いることとする。

①「指文字の使用について」：指文字の使用がまったく見られなかったのは8a, 8b, 7cの3名。人の名前の表現に指文字を使用する程度で他は空書の方法を取っていたのは8c, 7a, 7bの3名。他の26名は全員が指文字を用いていた。指文字は昭和4年に大阪市立聾学校が制定した種類で「大曾根式指文字」と称されており、現在全国に普及しているものである。この指文字が京都府立聾学校の授業に導入されたのは昭和25年前後と言われている。先の指文字をまったく使わない、もしくは人の名前に少し使う程度という6名のろう者は全員が昭和

25年よりも前に京都府立聾学校を離れている。ただし、同様の7d及び7gは指文字を流暢にこなしている。これは卒業後の社会生活の中で習得したものと思われる。

注意すべき点は、昭和25年前後に京都府立聾学校を離れたろう者は指文字を使えるにもかかわらず、文字を空書したり、次に記述する漢字手話を用いたりする傾向が強いことである。

②「漢字手話の使用について」：指文字と同じ感覚で文字としての漢字を表現する手話を漢字手話と定義する。たとえば、人差指、中指、薬指を開いた形(三本指)にした両手を接触させて「田」の漢字を表すものである。全体的に高齢になるにつれて漢字手話の使用頻度が高くなり、たとえば7a及び7iは漢字手話〈丸〉の使用が見られた。この漢字手話は〈9(九)〉を表わしたあと、同じ空間に点を打つ方法で表現され、京都地域では若年層には観察されないものである。

ほかには7aに〈長〉の漢字手話が観察された。これも京都地域の若年層には観察されないもので、指文字〈の〉と同じ形であるが、動きの方向が左下でなく右下になり、「長」の下部に伸びる線の筆跡に相当すると考えられる。

③「数字手話の使用について」：京都府立聾学校卒業生何名かの話によると、昭和25年頃までの京都府立聾学校では授業で本校独特の数字手話が使われていて、中国の身振り及び手話に見られる数字表現の形と酷似していたようである。いつから使用されていたかを示す資料にまだ接していない。昭和25年頃に導入された新しい数字手話の体系は大曾根式指文字と同じく大阪市立聾学校で考案されたものと言われている。全国でもこの数字手話の体系が

普及している。

聞き取り調査では京都府立聾学校独特の数字手話は観察されなかった。全員が現在と同じ数字手話の体系を使用していたが、年齢層による違いとしていくつかの特徴が見出された。数字手話のほかに、五本指と二本指の形にした両手をあわせて「7」の意味を作るような健聴者に見られる身振り表現を使う例が 8a, 7a, 7c に観察された。たとえば、8a は「65」を最初の表現では手話を用い、しばらくあとの表現では身振りを用いている。7a は「1 週間」という意味で五本指と二本指の両手を並べてまわす表現をしている。8a は「10 年間」の意味を伝えるために、〈年(複数形)〉〈10〉〈間〉と単語を並べており、真ん中にある〈10〉は五本指を開いた両手で表現されていた。また 7a は次に記述する数詞手話の範疇になるが「10 ヶ月」の意味を示す手話の単語構造の中で数字手話の〈10〉ではなく 8a と同じ身振り表現、つまり五本指を開いた両手を組み合わせ使用している。こういう身振り表現は年齢が下がるにつれてほとんど皆無となる。

数字手話〈10〉は現在東京地域に多い人差指を曲げる形と、大阪地域に多い親指と人差指で作る丸い形が良く知られているが、5 指全部を使う丸い形(指文字の〈お〉と同じ形)の使用が 7b, 7e, 7i, 5a に見られた。一方、大阪地域の形は 8c, 7k, 2b, 東京地域の形は 5b, 4a, 4b, 3b と、年齢層による分布がころうじて認められる。

数字手話〈100〉についても東京地域と大阪地域それぞれの形が知られているが、京都地域に観察された別の形は親指、中指、薬指をくっつけた、いわば「狐」の手型である。観察されたのは 8a, 7i の二例と少なかったが、京都地名「百万遍」の手話表現に「狐」の手型が含まれていることから、少なくとも 7i 以上の高齢者の中では使用されていたものと推測され

る。なお、大阪地域の形は 7e, 7k, 7n, 3b, 2a, 2b に観察され、東京地域の形は観察されなかった。

- ④「数詞手話の構造」について：数詞とは一般的に数によって数量や順序を表わす語のことであるが、ここでは条(通り)の表わし方、年齢の表わし方、メートルの表わし方の 3 例を取り上げる。京都地域は土地が碁盤目状に区画されており、東西の列を「条」と呼び、北から南へ向かって一条から十条まで敷かれている。京都地域の手話ではたとえば〈二条〉は二本指を上から下に下ろす形、〈三条〉なら三本指のように、上から下に下ろす部分と数字を表わす部分から数詞の構造が成り立っている。しかし、8a, 8b がすでにこの数詞を用いていることが観察されることから、数字の部分が手話ではなく身振りとしての数字が用いられている。つまり、〈七条〉は五本指と二本指を同時に上から下に下ろすことになる。この表現はほぼ全員に観察されたが、2a から下の若年層では〈五条〉から〈十条〉までは数字の部分が身振りではなく手話になっている。

年齢の表現は 8a において〈年齢〉の手話を下あごに接触して表現したあとに数字手話をあごの前に提示する方法が見られるが、本来は五本指を全部握る形で作られる〈年齢〉が次に来る数字手話の手型からの同化作用を受けて変化している。8b では〈年齢〉の手型が見られない代わりに数字手話そのものが下あごの位置から前に繰り出される形になっている。7d, 7g, 7j, 7n, 5a, 3a, 2a, ではあご前あるいは胸前の位置で数字を示した手を手首で振る動きが加わっている。この数字の前に〈年齢〉が入るか入らないかは前後の文脈に依存している。最年少の 2c では数字を最初に出してから〈年齢〉を表わす従来とは逆の順番の

(別添 3)

構造が観察された。

メートルの表わし方は 8b と 7i の 2 名に観察されたが、8b が「1 メートル」という意味で〈米〉を現してから数字手話〈1〉を示している一方、7i は「10 メートル」の意味として数字手話〈10〉を口先から前方にひねりながら繰り出している。単語の構造としては、前者が〈米〉〈1〉と二つの単語の連続で構成されるのに対し、後者は二つではなくひとつの単語として認識される。すなわち、口から前方に繰り出す動きそのものが「メートル」を表わす数詞的な機能を獲得しており、この動きに数字を表わす手型を組み込んで何メートルかを示すという構造になっている。

⑤「〈父〉の音韻的な特徴について：全国的に二つの形が見られる。人差指で頬に軽く触ってから親指を上立てた形に変化する形と、最初から親指を上立てた手型を頬から離す形である。前者が観察されたのは 8a, 8b, 8c, 7a, 7b, 7c, 7d, 7e, 7f, 7g, 7h, 7i, 7j, 7l, 7m, 7n, 7o, 6a, 6b, 6c, 6d, 2c、後者が観察されたのは 7h, 7k, 6d, 5a, 5b, 4a, 4b, 3a, 3b, 3c, 2a, 2b, 2c と、60 代前後を境とする年齢層の違いが一目瞭然である。ただし、7h, 6d, 2c に両方の形が観察されたことは、これら二つの異なる形が共存あるいは競合している可能性を示している。この傾向は〈母〉でもまったく同じものが観察された。

⑥「〈父母(両親)〉の音韻的な特徴について：一般的には人差指で頬に軽く触ってから親指と小指を上立てた手型に変化する形が知られているが、京都地域ではまったく別の形が見出された。それは最初に親指を上立てた手型を頬そばに示し、すぐ小指を上立てた手型に変化する形であり、興味深いことに上⑤に観察された分布とほぼ一致した。すなわち、

前者は 7k, 6d, 5a, 5b, 4a, 4b, 3a, 3b, 3c, 2a, 2b, 2c、後者は 8a, 8b, 8c, 7a, 7b, 7c, 7d, 7e, 7f, 7g, 7h, 7i, 7j, 7l, 7m, 7n, 7o, 6a, 6b, 6c に見られた。「父母」は意味論的に「父」と「母」の両方を含むため、手話の単語構成の上でも〈父〉〈母〉の手話が複合してひとつの手話になることははじめから予想される。焦点は⑤に記述した二つの違う形の手話のペアがそれぞれの複合過程でそれぞれ違う形の手話に組みなおされるための通則が存在するかどうかである。

⑦「京都地域特有の語彙について：年齢差が 45 年ほどある 7i と 2a, 2b の 3 名を対象に実施した聞き取り調査で判明したことは、7i の世代に使われていた多くの京都地域特有と見られる手話が、2a, 2b の世代では見たこともない種類 A、見たことはあるが自分たちは使わない種類 B、自分たちも使っている種類 C に分類されることである。

種類 A の例は、〈旅館〉〈池〉〈宝〉〈銀〉〈御所〉〈動物〉〈蹴上〉〈京都〉〈イタリア〉〈性〉〈何〉〈はがき〉。

種類 B の例は、〈八つ橋〉〈当たり前〉〈社会〉〈理科〉〈算数〉〈国語〉〈決勝〉〈卵〉〈本物〉〈マラソン〉〈ずるい〉〈幻滅〉〈遊ぶ〉。

種類 C の例は、〈慣れる〉〈水〉〈高い〉〈黒〉〈白〉〈緑〉〈紫〉〈蔵〉〈愛宕山〉〈比叡山〉〈怠け者〉〈まさか〉〈意地悪〉〈生理〉〈邪魔〉〈冗談〉〈有名〉〈妙〉〈身に覚えがない〉〈だまされる〉〈石〉〈石鹸〉。

このように三種類に分類される事実を年齢差 45 年と照らし合わせると、7i の世代と 2a, 2b の世代の間を中継する世代があると考えるのが普通であろう。この推論が正しければ、種類 A は中継する世代の中で使われなくなったもの、種類 B は中継する世代が使っていた



がが 2a, 2b の世代で使われなくなったもの、種類 C は中継する世代も 2a, 2b の世代も使っているものという仮説を立てられる。この仮説に立ってみると、種類 A の手話語彙は中継する世代において、種類 B の手話語彙は 2a, 2b の世代において、それぞれ他の地域、とくに東京や大阪地域の手話、あるいはいわゆる若者言葉と競合した結果使われなくなったものと考えられよう。

- ⑧「音韻的な変化：上記⑦で種類 C に分類されたもの、すなわち前と同じ形で続けて使用されている手話語彙の中には、実際には微妙な変化が生じている例が多い。たとえば、〈愛宕山〉は 8b で五本指を半分開いた左手の上に五本指を半分開いた右手を乗せる形が見られるが、7i は両手が拳骨になり、さらに 2a は左手の甲に拳骨の右手が乗る形となっている。他の例では〈だまされる〉は手型が平手から親指と人差指のみ開いたいわゆる「L」の形に変化している。また、〈石鹸〉は 7i がやや開いた拳骨をあごで 2 回ほどこする動きなのに対し、2a は拳骨がさらに開いて「C」の手型になっており、さらに 2b では親指と人差指で円形を作る、いわゆる「OK」の手型と変化している。

- (2) 電子辞書を活用した研究から得られた結果  
(京都在住のろう者と東京在住のろう者の手話言語の語法の違い、京都ろう学校卒業ろう者の年代による語法の違い)

- ⑨「年齢差が 45 年ほどある 7i と 2a, 2b の 3 名を対象に実施した聞き取り調査において、平成 16 年度の本研究で製作された DVD 資料「ろう社会で使われる手話言語の電子辞書 前編：基本単語計 140 語と類義別例文(2007 年 3 月暫定版)」を活用した。以下、電子辞書から 20 語を取り上げて年齢層による違いと地域による違いを記述する。

〈目的〉：2a, 2b はすべて問題はないと回答したが、7i はいくつかの例文について違和感を述べた。例 1 では文末に〈目的〉の挿入が必要、例 8 では逆に〈目的〉は不要。また、例 3 の語法は砕けた会話なら許されるとのこと。

〈悪い〉：3 名とも例 6 の語法は違和感があると述べた。〈悪い〉は「汚い」との意味では使えないというのが 3 名の意見である。

〈意味〉：3 名とも例 6 と例 8 について文末の〈意味〉は不要と述べた。なお、〈意味〉を文末で使用する例は言語資料にある 3b, 2a, 2b の手話表現にも頻出して見られた。3b での例は、〈絶対〉〈必要〉〈意味〉という手話表現で「絶対必要なのです」という強調表現になっている。

〈うそ〉：3 名とも例 1 については意味が把握できなかった。例 3、例 4 については 3 名とも意味は理解できるが、この例では別に存在する手話〈にせ〉の使用が適切であると述べた。

〈オーバー〉：2a, 2b は全部問題なく理解したが、7i は対照的に全部について違和感を述べた。例 1 は「ちょうど良い」という意味に捉え、例 2 は〈びっくり〉の使用が適切、例 6 は自分なら〈あんまり〉を使用すると述べた。言語資料における 7i の手話表現に一箇所〈オーバー〉に近い手話が見られたが、電子辞書にある〈オーバー〉ほどの音韻的な特徴はなく意味的には「超えている」とどまっている。

〈指差し〉〈冗談〉〈でたらめ〉〈超えている〉〈気持ち悪い〉という表現で、「あなたは冗談やでたらめの度が過ぎるので付き合いきれない」との意味になっている。

〈くだらない〉：7i は例 6 のみ違和感がないとし、例 1 は語法がそぐわない、例 2 は〈弱い〉、例 3 は〈必要ない〉、例 4 は〈面白くない〉、例 5 は〈興味ない〉〈面白くない〉、

(別添 3)

例 7 は〈小さい〉、例 8 は〈目的〉、例 9 は〈普通〉〈簡単〉、例 10 は〈簡単〉、例 11 は〈簡単〉、例 12 は、〈簡単〉〈あつという間〉の使用が適切と述べた。2a, 2b は全体的に〈簡単〉の使用が適切としつつ、全部理解できると述べた。

〈言う(ヒ)〉：2a, 2b は全部理解できるとし、例 7 からは高齢者には理解が困難ではないかと述べた。その通り、7i は例 7 と例 8 の意味を理解できず、自分もそのような使い方はしないと述べた。

〈かまわない〉：3 名ともに例 7 の語法を不適切とした。

〈方法がない〉：3 名とも例 1 と例 2 は〈できない〉の使用が適切、例 3 と例 4 は京都地域特有の手話〈邪魔〉の使用が適切と一致した。

〈なんだ(ク)胸〉：7i はこの手話を若者に特有の言葉だろうと述べ、理解できるとしながら、例 3、例 4 は〈損する〉〈目が安い〉の使用が適切ではないかと述べた。2a, 2b は怒る感情が顔に表れていないと指摘し、例 3、例 4 は別に適切な単語があるように思うと述べた。

〈ムリ(レ)〉：3 名ともこの手話は高齢者は使わないのではないかと指摘し、代わりに〈難しい〉〈ばあ〉などの使用があることを述べた。しかし、言語資料によると、指文字を使用しない高年層でも 8b にこの手話が見られた。おそらくは、指文字として覚えたのではなく、ひとつの手話の形として覚えたのであろうと思われる。なお、3 名とも〈ムリ(ヒ)〉が京都地域で使われる手話であることで一致した。

〈縁を切る〉：3 名ともこの手話は「関係ない」という意味にとどまるとし、「縁を切る」意味でははさみで切るようなイメージの手話を使用すると述べた。なお、例 5 について、7i は例 5A が一番適切であるとした。

〈OK〉：2a, 2b は全部問題はなしとし、高齢者には理解も表現も困難ではないかと述べた。その通り、7i はこの手話は使わないとし、それぞれ別の手話の使用が適切と述べた。例 1 は首のうなずきで十分、例 2 は〈合う〉、例 3 は〈みんな同じ〉、例 4 は〈終わり〉、例 5 は〈大丈夫〉、例 6 は〈得意〉、例 7 は〈平気〉。

〈合わない(テ)〉：3 名ともこの語法に違和感があるとし、両手人差し指を使う形の使用が適切と述べた。なお、〈合わない(テ)〉は話が合わないときに使用する手話という意見であった。

〈一発〉：3 名とも例 2 に違和感を指摘し、指差して十分ではないかと述べた。

〈ついでに〉：3 名とも例 3 に違和感を指摘し、〈同時に〉の使用が適切と述べた。

〈飽きる〉：7i は例 3 の語法に違和感があるとし、〈あきらめる〉の使用が適切と述べた。

〈いいえ〉：3 名とも例 1、例 2、例 3 は〈違う〉の使用が適切であるとした。

〈違う〉：2a, 2b は全部問題はないとしたが、例 5 から例 12 までは高齢者にはない使われ方であろうと述べた。その通り、7i は例 5 から例 12 までについて〈同じ〉の使用が適切であると述べた。

〈良かった〉：3 名ともこの語法は京都では見られないとし、「ほっとした」という意味で使用されるとした。

(3)考察

① 年齢層による語彙上の違いについて：指文字、漢字手話、数字手話、数詞手話、〈父〉、〈父母〉の分析により、京都府立豊学校在籍経験者の年齢層における語彙上の違いが確認された。整理すると以下ようになる。

70 代後半以上は空書の使用が多いが、それより下になると指文字と空書の併用が見られ、

60代から指文字の使用頻度が強まる。

一方、数字手話は年齢層に関係なくすべてが現在の体系を使用しているが、〈10〉〈100〉などの数字については、京都特有の形がまず大阪地域の形との競合の結果消滅し、ついで東京地域の形が広がりだしている状況を認められる。また、数字を身振りで表わす方法が70代後半以上見られる。

数詞手話については、条の数詞構造が80代ですでに観察され、続いてメートル及び年齢の数詞構造は70代前半で観察されている。条と年齢の数詞構造は20代でも観察されるが、メートルの数詞構造の若年層における存在については不明である。

〈父〉及び〈母〉の音韻構造では、60代を境に違う構造の形が使用されている様子が観察された。60代より下で使用されている形は東京地域の手話と同じである。

京都地域特有の語彙については、70代に使用が見られるが20代では見られないという例が多く認められた。また、70代と20代の間の中継する世代が存在し、多くの語彙が中継の段階で消滅していることも認められた。ただし、70代と20代に共通して見られる京都地域特有の語彙も多く残されている。

以上の整理を見てみると、年齢層における語彙上の違いが段階的に起きていることが確認される。これらの違いを言語変化の現象として捉えるならば、この現象を規定する要素として、聾学校における手話言語環境と、東京、大阪地域の手話の影響を設定することが妥当と思われる。

- ② 地域による語彙上の違いについて：電子辞書を活用しての分析で明らかにされた点は、電子辞書に提示される語彙が京都地域で使用されていない、同じ形であっても意味や語法にずれが認められること、そしていくつかの語

彙の語法については同じ京都地域でも年齢層による違いが存在することである。

日本語の語彙において地域及び年齢による違いが見られることはごく一般的な知識として広まっているが、同じ現象が手話にも見られるということである。

- ③ 仮説の提起：上で手話に地域及び年齢による違いが存在し、年齢層による違いは言語変化の現象として分析の対象となることを述べたが、ここでは聾学校における手話言語環境が言語変化に及ぼす影響について考察し、仮説を提起したい。

京都府立聾学校は明治11年に「日本最初盲啞院」として創立されており、京都市の管轄下で口話指導が始まったのは大正10年に小学部に入学した生徒から始められたとされている。やがて大正15年に「京都聾口話幼稚園」が別途開設され、昭和6年の京都府への移管に伴う統合により口話指導の徹底が全校生徒に及ぶようになった。

京都聾口話学園(幼稚園)が昭和5年9月に発行している「啞が物を言ふまで」に、本校の三大特長として、「啞に物を言はせるためには(1)読唇練習によること、(2)手真似を全廃すること、(3)発音・発語を練ること」と記されている。

京都府立聾学校の職員会議を記録した「職員会誌 昭和7年4月」には次の記載が見られる。

「4月8日 遠足の件、手話組は東山廻り、初口話組未定」

「5月6日：校長告示事項 近頃、手話生、口話生の学校内において相互に接近し会話遊戯を共にするの嫌いあるにより、可成接近せしめず登校すは放課後の帰宅の際も時間に余裕あらしめず、取り締まるべし而て口話生の手真似を用いたる場合は厳重に訓

論し、禁止せしむべし口話生は一切手真似を用ゆるべからず 以上」

以上の資料により断定できることは、大正 10 年に始まる口話法教育が、昭和 6 年の京都府への移管とともに全校の方針として推進されていったこと、そして口話指導の対象学生に手話の使用は厳しく禁じられ、手話による指導が必要な学生は手話組として授業も行事も別々にさせられたことである。口話法の推進による手話追放という当時の状況を強調することは本稿の意図するところではない。むしろ、明治 11 年に創立されてから少なくとも昭和 7 年頃までの間、手話による指導が続けられ、学生も手話を用いてきたということに注目したい。その期間は実に 50 年を超える長さである。言い換えれば、創立以来 50 年間は教員と学生の間で手話が自由に使用されてきたのである。

本研究の言語資料で最年長となる 8a の世代が京都府立聾学校高学年に在籍したのは昭和 10 年前後である。よって、8a, 8b, 8c の手話表現に見られる語彙的な特徴を創立以来 50 年間で発展してきた手話言語の到達点として位置づけたい。

昭和 7 年以降は口話法推進による手話及び手話使用学生への抑圧がかかっていることを考えると、この環境変化が手話の語彙・文法に与える影響ははるかに大きかったのではないか、これが本研究で提起する第一の仮説である。

第二の仮説は、昭和 41 年の京都市立出水小学校及び昭和 42 年の京都市立二条中学校への難聴学級設置等による統合教育の開始に伴う京都府立聾学校の学生数減少が引き起こす手話言語環境の激変が手話の語彙・文法に大きな影響を及ぼしたのではないかという点である。この仮説は 4a, 4b, 3a, 3b, 3c, 2a, 2b, 2c によって生成された言語資料すべてに共

通して見られる学生同士の意思疎通に困難さを感じた経験の叙述が、5b 以上の年齢層にはまったく見られないことから、検証を試みる意義は大きい。

第一仮説と第二仮説を言語学的に検証することは究極的に聾学校における手話と手話使用学生への直接的及び間接的な抑圧が手話言語を必要とするろう者への言語的迫害に結びつくことの解明につながるものと予想される。

- ④ 課題(1)：手話言語地図の作成に向けて：手話の言語的な特徴を説明していくためのひとつの方法として、手話言語地図の作成が求められている。地域や年代による語彙・文法の違いを明らかにする分断的・総合的な言語研究の基盤を準備することが手話言語地図の作成に当たっての必要条件である。

この分担研究で得られた成果は、聾学校における指文字、数字手話の導入時期などの調査、各年齢層における指文字、漢字手話、数字手話、数詞手話の使用状況、そして〈父〉〈母〉〈父母〉の音韻的な特徴、さらにその地域特有の語彙の使用状況に焦点をあてることで、年齢層による違いを分析することが有意義であることが見出された点である。ただし、聞き手が聾学校や仕事などの話題を中心に聞き取る方法だけではなく、上記の分析項目に呼応してすぐ手話表現を得られるような効率的な方法、たとえば「運転免許試験の聴力検査は何メートル離れてやるのでしたか」と質問する方法とか、1メートル、5メートル、10メートルなど違う長さのブロックを並べた映像を提示して説明を求める方法とか、誘出を意図した仕掛けの開発が必要になるであろう。

もう一点、電子辞書に収められた例文を提示して理解の是非、理解しにくい場合はその理由、代案の有無などを集中的に聞き取る調

査の有効性も確認された。

- ⑤ 課題(2)：手話通訳養成への活用について：手話通訳者の多くが高齢者の手話の読み取りに困難さを感じていることが指摘されている。高齢者の手話語彙・文法に特徴があることはこの分担研究でも明らかにされているが、これらの特徴を学習用に編集していくこととは別に、研究で示唆された点を二つ述べる。(1) 電子辞書の手話表現に、京都のろう者が理解するに困難な例文が多くあったということは、ろう者でさえ理解できない例文を手話通訳者が理解することが果たして可能なのか。(2) 手話通訳者が高齢者の手話の読み取りに困難さを感じる以前に、高齢者との交流の不足などで高齢者の生活史や生活観に触れていないのではないか。

この二点を踏まえて、聞き手も加わっての会話で構成される言語資料のうち、語彙や文法上の特徴が含まれた会話構文を選定し、談話分析の方法をもって、慣れない語彙と文法への理解とともに高齢者が過ごした学校生活や仕事生活への理解を深めて生活観に迫っていくような訓練が手話通訳養成に求められるのではないかと考える。

たとえば、8bの少年時代に愛宕山でスキーを楽しんでいたことの叙述部分(4分弱)には、語彙・文法面では年齢を現す数詞、メートルを現す数詞、〈母〉の音韻的な特徴、愛宕山や比叡山など京都地域の地名手話、〈覚える〉の音韻的な特徴が含まれており、「一年中にぎわう」という意味を〈一年〉〈忙しい〉〈続く〉と表現するなど通訳上の言い換えに応用できる知識も含まれ、前は愛宕山がスキー場でにぎわっていたが今は寂れてしまったことなど京都の一般的な歴史に関する知識も見られる。

この4分に満たなくても内容の豊かな断片のみを教材に談話分析の方法による指導

を行うといった試行からはじめてみる必要があると考える。

- ⑥ 課題(3)：特別支援教育への活用について：昔の京都の街の様子、聾学校での体育活動、行事、卒業後の健聴者の世界、仕事、高齢聴覚障害者福祉、盲ろう者への通訳など、言語資料は様々な話題に富んでいる。話題別に整理して、索引から呼び出せるような仕組み(電子媒体)を用意することで、聾学校、通級、難聴学級、通常学級と多岐に広がる特別支援教育の中で、学生の手話学習及び自立活動への支援を行うことが考えられる。

## E. 結論

### 東京地域の研究

- ① 14人のろう者の30分くらいの日常会話で使用されていた単語の種類はのべ数は、1700語以上にのぼっていた。
- ② 手話単語の構成要素の1種である手型別に単語を分類すると、手型の使用頻度にはおおきな偏りがあった。
- ③ 高齢のろう者のほうが、使用する単語の種類が多いような傾向がみられた。
- ④ ろう者が生活している社会情勢の変化によって、単語の表現に変化が見られるものがあった。
- ⑤ 社会の変化に合わせて、あたらしく出現した単語がかなりあった。
- ⑥ 高齢ろう者の対話では、手話言語を特徴付ける「CL」や「ロールシフト」が多用されていた。
- ⑦ 基本語彙のなかにも、語法が変化している単語があった。
- ⑧ 語法が変化していた32単語について、高齢ろう者と若いろう者の手話表現を両方を載せて、高齢の手話表現の違いがわかる手話言語のデータベースを作成した。

京都地域の研究

- ① 立聾学校在籍経験者より生成された手話の言語資料及び電子辞書等の補助資料を用いての分析により、日本語などの音声言語と同様に手話も通時的に共時的に語彙の変化に富むことが、京都地域でも確認された。
- ② ろう学校における手話言語環境の調整が手話の語彙と文法に大きな影響を及ぼしている可能性についての仮説を索出した。
- ③ 仮説の検証は手話言語地図の作成という課題の中でなされていくべきであり、また本研究中で生成された言語資料が手話通訳養成及び聾教育に果たすであろう可能性にも言及した。

E. 研究論文発表

1. 論文発表 なし
2. 学会発表 なし

F. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案特許
3. その他 なし

表 1. 収録したろう者のプロフィール

---

70 歳台	3 名
60 歳台	2 名
50 歳台	2 名
40 歳代	1 名
30 歳台	3 名
20 歳台	3 名

---

表 2. 拾い上げたラベルの種類 (手型別)

---

イ	ウ	エ	オ	キ	ク	ケ
24 種	29 種	25 種	69 種	7 種	307 種	45 種
サ	シ	タ	チ	テ	ニ	又
137 種	21 種	89 種	2 種	260 種	83 種	23 種
ヒ	メ	モ	ヤ	レ	レ(曲)	口
298 種	67 種	68 種	85 種	41 種	19 種	41 種
		<b>顔だけの表現</b>				
中指	ILY					
4 種	1 種	3 種				

---

## (別添 3)

表 3. 30 分あたりの対話で発せられた単語の総単語数と, 単語の種類の数

対象者のプロフィール	単語の総数	単語の種類数
70 歳台	2062	567
60 歳台	2625	473
60 歳台	2649	599
40 歳台	1465	326
30 歳台	2675	399
30 歳台	1357	352
20 歳台	1363	322
20 歳台	2012	408
20 歳台	1754	377

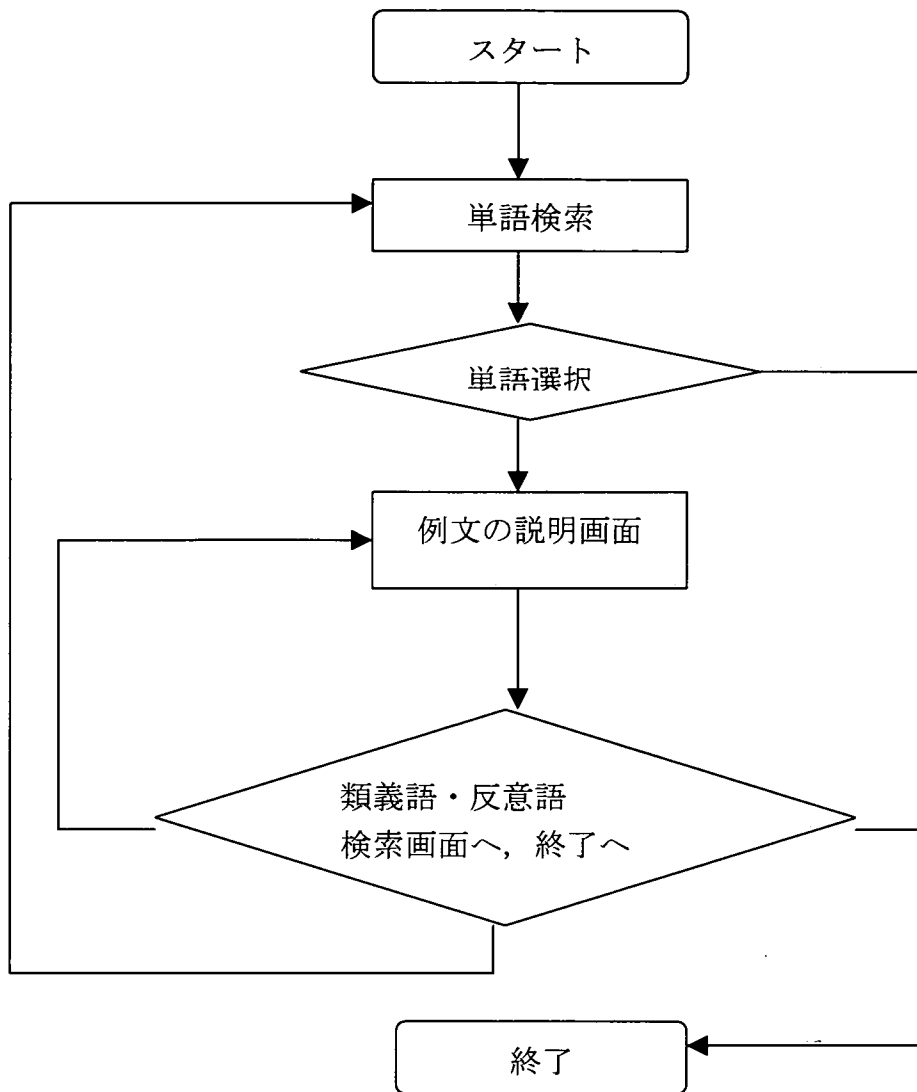
表 4. 高齢ろう者と若いろう者の手話表現をを載せた単語

ややこしい (E 2)	つまらない(エ) (E 3)
高齢 (E 6)	目的 (H I 1)
わからない(ヒ) (H I 3)	言う(ヒ) (H I 4)
スムーズ (H I 9)	くだらない (H I 1 3)
ムリ(ヒ) (H I 1 4)	上がる(ク) (K U 6)
下がる (K U 7)	なんだ(ク) (K U 1 7)
欲する (K U 2 5)	ない(メ) (M E 5)
早い (M O 5)	失敗(顔) (K A O 1)
言う(オ) (O 1)	つまらない(オ) (O 4)
忘れる (O 7)	違い(レ) (R E 2)
ムリ(レ) (R E 4)	普通 (R E 7)
好き (R E 8)	違反 (R O 1)
する(サ) (S A 2)	成功(サ(下)) (S A 7)
行く (タ) (T A 1)	飽きる (T A 2)
すそまくる (T A 4)	倒す (T A 5)
だめ(タ) (T E 7)	得意 (Y A 1)



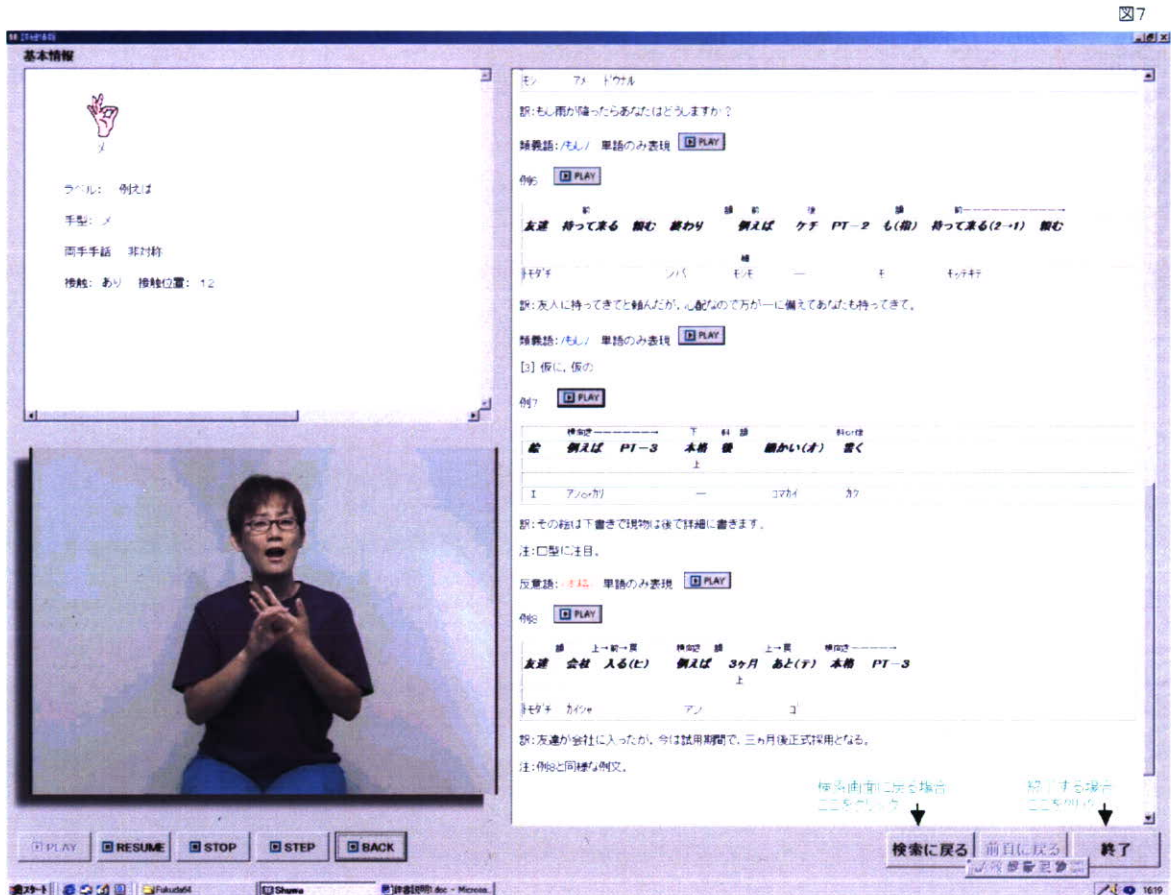
(別添 3)

図 1. データベースの検索のフローチャート



(別添 3)

図 2. データベースのディスプレイ画面の例



三番目の語義「仮に、仮の」の例文は例7と例8。

この画面には、類義語や反意語も示し、それらの単語が辞書に掲載している場合はその頁に、とぶことが可能。掲載がない場合には単語表現だけを掲載。

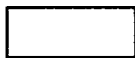


(別添 3)

表 5. 高齢ろう者と若い世代のろう者の単語の用法の違いの説明画面 (赤字が高齢者の表現) の例  
意味

[1] 意味 (基本)

例 1



斜-----→
<b>PT-2 説明 (2→1) 意味 わからない (テ)</b>
ル-----→
細-----→
イ

訳：あなたの話は意味がわかりません。

注：「意味」「意味する」の意味。日本語口型「イ」を伴うことが多い。

例 2



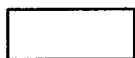
下	下	後
<b>沖縄 地域 言う (ヒ) (繰) めんそうれ どうぞ 意味</b>		
上	上	上
丸		
オキリ オケン	メソレ	イ

訳：沖縄の方言で「めんそーれ」は、歓迎という意味です。

注：「ということ」「という意味」の意味。この例文のように文末に/意味/がきた場合、左手の動きは消失し、右手だけの片手手話として表されるのが一般的。

[2] 「～だから」, 「～なので」 (理由)

例 3



横向き	上→下	
<b>本 RS (投げつける) 本 RS (投げつける) イライラ 意味</b>		
ル-----→	ル-----→	
ホ	イ	イ

訳：(本を投げつけている人を見て他の人に) いらいらしてるの？

(別添 3)

注：「～だから」，「～なので」の意味。文末におかれることが多い。この例文は，本を投げつけている人にRSをして，次にそれを見た自分になっている。/イライラ/の前に表れている視線の方向や表情からが自分。

例 4



下 額 下
いつも マスク 花 病気 意味 PT-2
ル-----→
細-----→
イモ マスク カンショウ イ

訳：いつもマスクをしているけど花粉症なの？

参考-高齢者（男性）A

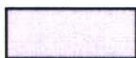


斜→戻 横向き 額 下→戻 下 下
過去 から アメリカ 場所 勉強 好き 憧れ(線) 働く お金を貯める 成功(サ下) 飛行機 終わり (テ) やっと
ル ル-----→ ル-----→ ル-----→ ル-----→
眠-----→ 閉-----→ 閉-----→ 閉-----→ 閉-----→ 閉
マエ カラ アメリカ ベン タイ イ 膨らむ ホ バ バ

訳：かねてからアメリカ留学をしたいと思っており，お金を貯めて渡米したのです。

注：同内容を若者が表現すると，/やっと/のところで/意味/を用いることが多い。

参考-高齢者（女性）A



額 下 下-----→戻 斜
PT-1 過去 から アメリカ PT-3 勉強 憧れ お金 お金を貯める やっと 飛行機 PT-1
ル-----→
細 細-----→
マエカラ アメリカ ア バ

訳：かねてからアメリカ留学をしたいと思っており，お金を貯めて渡米したのです。

注：参考-高齢者（男性）A と同内容の別の表現。若者は文末の/PT-1/のところで/意味/を用いることが多い。